

メディアアミックスの 悪魔

井上伸一郎の
おたく文化史



井上伸一郎

装画 CLAMP
聞き手・解説 宇野常寛

「ネットに氾濫する不正確な情報じゃないぞ」
これが**80年アニメ業界**の
（ほぼ）**真実だ!**
デザイナー
永野護
推薦!!
『少年エース』『ニュータイプ』の創刊を手がけ、
編集者として『ファイブスター物語』等の数々の名作と歩み、
角川歴彦とともにKADOKAWA経営統合までを成功に導いた
KADOKAWAの「屋台骨」を支えた男の「おたく一代記」!

メディアミックスの悪魔

井上伸一郎のおたく文化史

井上伸一郎

星海社

328



SEIKAISHA
SHINSHO

「東京国際アニメフェア」ボイコット

「みんなに迷惑をかけるかもしれないが、私は『東京国際アニメフェア』の出展を取りやめたいと思う」

2010年12月頭のことでした。当時、かどかわしよてん角川書店の社長だった私は、会社のアニメ宣伝担当者たちにそう決意表明しました。

「東京国際アニメフェア」は毎年3月に行われる、東京都や日本ほんとうが動画協きょうかい会をはじめとするアニメ事業者が主催する大きなイベントです。角川書店も2002年の「新世紀東京国際アニメフェア21」から実行委員としてコミットしていました。翌2003年からは「東京国際アニメフェア2003」となり、年号をつけた毎年開催のイベントになりました。

私が決意表明したのは、2011年に開かれる「東京国際アニメフェア2011」への

参加と協力の拒否でした。

なぜそんな判断にいたったのか。

全てはイベントの実行委員会委員長であり、当時の東京都知事だった石原慎太郎いしはらしんたろうの言動によるものです。長年ずっと我慢してきたところに、ついに堪忍袋の緒が切れる出来事が起こったのです。

それが、2010年11月。石原慎太郎が主導して自民党・公明党・民主党によって改正案が練られた「東京都青少年の健全な育成に関する条例」の提出です。

この条例による「表現規制」がそのまま実行されたら、とんでもない世の中になる。私の直感がそう告げていました。

この「東京都青少年健全育成条例改正案」のことを少し説明します。この条例は、もともと青少年（18歳未満）の健全な育成を目的として掲げていました。それにそぐわない書籍などは「有害図書」として指定される条例です。

この改正案の問題点は、見た目で18歳未満と見なされる人物が描かれたイラスト、マンガ、ゲーム、アニメ、映画などのうち、エロティックな表現があるものを規制対象にする点でした。条文では「漫画、アニメーションその他の画像（実写を除く。）」という修正が行

われました。

小説家出身の石原慎太郎都知事は

「小説は文字で脳内でイメージするからいいが、画像は目に見えるからダメだ」と語ったそうです。

さらに改正案に反対するマンガ家に対して、

「ある意味で卑しい仕事をしている」「書き手が無言の制約を受け、圧力を感じて書きたいことも書けなくなるということなのだろう。その連中が、そんなことくらいで書けなくなるなら、そんなものは作家じゃない」

と発言しました。これはマンガやアニメに対するジャンル差別、職業差別です。

実際の18歳以下の児童が性的な被害を受けることは、当然ながら阻止しなければなりません。

しかし実在の被害者が存在しない、イラストなど2次元の表現物にまで規制対象を広げるとは、ナンセンスとしか言いようがありません。

知性ではなく感情が優先して、自分が気に食わないものを虐げているのではないか。偏見が剥き出しになっていると感じました。

そもそもこの条例は、憲法第21条「表現の自由」に明らかに違反しています。長年出版社でアニメやマンガ、小説などの表現に関わってきた私には、看過かんができるものではありませんでした。

表現の仕方はお上が決めるものではない。作り手である作家や送り手である出版社やアニメ会社の人間が考えて、時代に合わせて自ら修正していけばいいだけのことです。

さらに驚いたのは、11月に提出された改正案が、12月の都議会でも決されるといふ突貫スケジュールです。採決が決定的なものだということも新聞で知りました。

作家や出版社の意見を聞き取りもせず、議論も深まっていななかでの改正案可決は、拙速そくの誹そしりを免れません。危機感が強く芽生えました。

改正案を支持する人の意見の中には、明らかに事実誤認に基づいたものもあります。

「実態を無視して、早く改正案を通したい勢力が裏にいるのではないか」という疑いを持ちました。

「子供を守るために有害図書規制する」とだけ聞けば、反対の声を上げにくくなるのは事実です。多くの人は、「表現の自由」という目に見えない理念より、「安心・安全」という目の前の現実を重視します。

「表現の自由」を掲げても、選挙の票に結び付きにくいという現実があるかもしれません。その結果、改正案に反対する声は大きくなっていませんでした。多くの人の関心を得られずに、改正案が採決されようとしていました。

歴史を顧みれば、国が誤った道を進みだすときには、きまつて表現規制が強化されてきました。

政治活動や思想をいきなり規制するのはハードルが高いので、まずは反対の声が上がりにくい「エロ・グロ」の規制が厳しくなります。やがて規制の輪は、私たちの生活の根幹にまで広がってくる。それが過去から学ぶことができる現実です。

「表現規制」の問題は、為政者に恣意的に運用されると、思わぬ方向に拡大してゆく危険をはらんでいるのです。

それではどうすれば、改正案の問題点に一般の耳目を向けることができるのか。

出版社が反対と言ったところで、目新しさはありません。むしろ改正案推進派から「自分たちの利益を守るためにやっているんだろう」と邪推されるでしょう。

そこで思いついたのが「東京国際アニメフェアに出展しない」というアイデアでした。

一見すると、ふたつの事象には何の関連もないかに見えるかもしれませんが。しかしこれ

こそが、東京都知事のダブルスタンダードの盲点を突くポイントでした。

「東京国際アニメフェア」への不参加表明は、東京都青少年健全育成条例改正案を巡る論議に一石を投じるはずだ、という確信がありました。

話は2001年に遡ります。東京都からアニメ製作会社やアニメ制作スタジオに「東京国際アニメフェア21」を立ち上げるから協力してほしい、という連絡がありました。

「事情はよく分からないけれど、まずは東京都庁に行って話を聞いてみるか」という軽い気持ちで西新宿に出向きました。

都庁の大講堂に関係者一同が集められて都からの説明を聞いたのですが、東京ビッグサイトで見本市型のイベントをやりたいというだけで、明確な理念が感じられませんでした。都の職員の方々と話をするものの、彼らも石原都知事が言い出したことに振り回されている感じです。東京都のイベントの盛り上げに、アニメの力を利用しようとしているだけはないか。そんな印象を持ちました。

出展をお願いされている立場にもかかわらず「すでに開催は決定しているから参加すべし」という上から目線の物言いをされました。アニメ制作スタジオのプロデューサーたち

と「いったい何がやりたんだ」と愚痴を言いながら都庁を出たのを覚えています。アニメ関係者の意思ではなく、都から「やらされている」感じで、その後何年かの「東京国際アニメフェア」が行われました。

「東京国際アニメフェア」と同時開催されるのが「東京アニメアワード」です。毎年アニメフェアの最終日に、会場である東京ビッグサイトで授賞式が行われます。

特に印象に残った事件がありました。2005年の「東京アニメアワード」でのことです。

この年は『ハウルの動く城』で宮崎駿みやざきはやお監督が監督賞を受賞しました。壇上で石原慎太郎都知事が宮崎さんに表彰状を手渡した後、宮崎さんを壇上に立たせたまま、スピーチを始めました。受賞者の宮崎さんやアニメ関係者の労をたたえる内容であればよかったです
が、

「日本のアニメ界には宮崎さんしかいないのか。毎回宮崎さんが受賞するようではだめだ」
「日本のアニメは同じようなものばかりだ。もっと人を助けるような内容のアニメを作れないのか」

というような自説をまくし立てたのです。

日本のアニメの現状を知らないで話しているのは明らかでした。

客席にいた私には、石原都知事の後ろに立たされたままの宮崎さんの顔が、どんどん強張ってゆくように見えました。

都知事はアニメにリスペクトを感じていない、と痛感した瞬間でした。

また、こんな出来事もありました。確か2006年のアニメフェアの準備会でのことです。この時も都庁の大講堂に、実行委員会のアニメ関係者が集められていました。

会に現れた石原都知事は、冒頭の挨拶で、

「やはりアニメフェアにはアワードが必要だ。来年からアワードを作ろう」

と一方的に話すと、さっさと奥に引っ込んでしまいました。

前出の通り、すでにアワードは存在するのに、どういう意味なのか。会場全体がポカーンとした空気に包まれました。もしかしたら「東京アニメアワード」の存在自体を忘れていたのかもしれない。都知事にとって、アワードはそれくらい軽い存在なのか。やはりアニメを軽視しているのだな、ということだけは伝わってきました。

「都知事の発言はどういう意味だったんでしょうか？」

会の終了後に都の職員の方が困り顔で相談にきましたが、

「分かりません。ご自分で聞いてくださいよ」

と答えることしかできませんでした。

さらに2007年のことです。「東京アニメフェア」開催の前夜には、委員会や関係者を集めた小規模のパーティが毎年開かれていました。2007年は、このパーティが例年とは違い、東京湾のクルーズ船で行われたのです。

「今年のパーティは規模が大きいな。ようやく東京都もアニメ関係者に敬意を払うようになってくれたのか」

クルーズ船のデッキで夜の東京湾を見ながら感慨にふけていると、ある人が、「今年は都知事選がありますからね」

と囁いてきました。一気に体の熱が冷める思いでした。

本当に選挙があるからパーティを豪華にしたのかは分かりませんが、こんなところでもアニメを利用するのか、と冷えた怒りが湧いたのを覚えています。

アニメやマンガを蔑みながら、一方ではその力を借りて人気取りに利用する。ダブルスタンダードそのものです。

このようなことが繰り返されて、石原都知事に対して不信感がつのっていきました。

その結果、表現規制問題に徹底的に抗戦しようという思いに至ったのです。

「東京国際アニメフェア」に出展しないことを表明する。その理由を表現規制問題に求める。

普段は表現規制問題に無関心なマスコミや一般の方々も、こうした戦い方なら注目してくれるに違いない、という狙いがありました。みんな他人の喧嘩けんかを見るのは大好きですからね。

自分にとっては、これが世間の耳目を集める「たったひとつの冴えたやりかた」だったのです。

このアイデアを実行するにあたり、真っ先に相談した人物がいます。それがマンガ家・デザイナーの永野護ながの まもるさんです。

この後の章で詳しく語りますが、私の仕事人生に大きな影響を与えた3人の人物のひとつです。長く仕事を共にしたパートナーであり、大切な友人でもあります。

私はまず最初に、表現規制問題の当事者である永野さんの意見を聞きたかったのです。「伸ちゃんしんがやりたいんなら、いいんじゃないか。アニメやマンガやゲームが、政治家の

コントロールを受けたら終わりだよ」

永野さんは私のアイデアを支持してくれました。

彼とは私が最初に仕事を始めた「アニメック」編集部時代に知り合いました。「月刊ニュータイプ」では彼の『ファイブスター物語』ストリーズの初代担当編集者を務めていました。お互いに気心の知れた仲間です。だからきつと理解してくれると信じていました。

正直、永野さんに止められたらこのアイデアは捨てようと考えていました。彼が支持してくれたことで、自分の心のアクセルを踏みこめました。

東京国際アニメフェアの角川書店の担当はアニメの宣伝部隊です。すぐにアニメの宣伝担当者を集めて、自分の決意表明をしたのは前述の通りです。

アニメフェアに出展しないということは、その春放送のアニメを宣伝する機会のひとつを失うことになります。担当者たちから反対の声が出るかと思いきや、意外にも私の提案に賛成してくれました。みんなも石原都知事の言動には反感を持っていました。

こうした流れを受け、12月8日に私の「Twitter（現・X）」の個人アカウントで、

「さてこの度、角川書店は来年の東京アニメフェアへの出展を取りやめることにいたしました。マンガ家やアニメ関係者に対しての、都の姿勢に納得のいかないところがありま

して。」

とツイートしました。

最初は都条例改正案について直接触れた文を書いたのですが、アニメ宣伝部のメンバーから、

「表現に余白を残した方がいい」

とアドバイスを受けて、この文章になりました。確かにこれは効果的で、ツイートを讀んでくださった方々の想像力を刺激したようです。

私のツイートは瞬く間に大量に拡散されました。

表現規制に反対する人々の共感を呼び、励ましの声も寄せられました。

翌日にはマスコミにも大きく取り上げられました。地下鉄の駅を歩いていて、偶然「東京都对角川書店」とデカデカと書かれた夕刊紙のキオスクのPOPを見た時は、さすがにぎよっとしましたが。

当時の角川書店は、角川グループホールディングスという、持ち株会社の傘下にある出版社のひとつでした。親会社のホールディングスには角川歴彦会長かどかわつぐひこや佐藤辰男社長さとうたつおという私の上司にあたる方たちがいたのですが、彼らには事前に一言も連絡していませんでした。

「止めろ」と言われるのが嫌だったからです。当時の角川グループには、子会社の社長にそのくらい自由な裁量権さいりょうけんが与えられていました。現在ですと、「企業としてのガバナンスが云々」と言われるかもしれませんね。

「東京国際アニメフェア」不参加表明は目論み通り、いや、目論み以上に大きな話題になりました。

表現規制反対派の方々はもちろん、今までこの問題に関心の薄かった層にも届きました。都条例改正案は人々の目にさらされ、改正反対の声が日に日に大きくなるのを実感しました。

それに合わせて、東京国際アニメフェアへの出展を辞退する企業も増えていきます。最初は角川書店一社だけの動きでしたが、他の企業も続々と名乗りを上げました。特にマンガを預かる出版社は、すぐに結束を固めました。最終的には秋田書店あきたしよてん、角川書店、講談社こうたんしゃ、集英社しゅうえいしゃ、小学館しょうがくかん、少年画報社しょうねんが、新潮社しんちようしゃ、白泉社はくせんしゃ、双葉社ふたばしゃ、リイド社りいどしゃで構成された「コミック10社会」として、「東京国際アニメフェア2011」に、協力と参加の拒否をする声明を発表しました。その声明のなかでも実行委員長である石原慎太郎都知事の言動に苦言を呈しました。都条例改正案が、マンガ家やアニメ制作者との話し合いが一度もないまま

に進められていることを批判したのです。

当の石原都知事は、

「これ（条例改正）を理由に来ないならどっかの会社がね。来なきゃいいんだよ、アニメフェアに。来年、ほえ面ほえまかいてるよ。ずっと来なくてもいいよ。来る連中だけでやります」と語りました。大半の出展社がアニメフェアの出展を辞退することになるとは、想像していませんでした。

石原都知事はこんな調子でしたが、おそらく都の現場は大慌てだったのでしょう。裏では猪瀬直樹いのせ なおき副都知事が私に接触を求めてきました。

「都条例改正案とアニメフェアについて話し合いたい」と言うのです。

都条例改正案の見直しにつながるかもしれないと、一縷いちろうの望みを持ちました。当時の角川書店の法務担当者を伴って、猪瀬副都知事と都庁で対面しました。

猪瀬副都知事は椅子に座ったまま、タバコをくゆらして、私たちを迎えました。

「アニメフェアへの協力拒否について考え直してくれ」

と、石原都知事とは正反対のことを言われました。もちろん、それは拒否せざるを得ま

せん。

肝心の都条例改正案についてはお互いの意見は平行線でした。ただ、条例が独り歩きしないように、有害図書審査員に現役の人気マンガ家を加えてはどうか、というアイデアが猪瀬副都知事側から出され、それは検討の余地があるかもしれないと思いました。

いずれにしろ、その時はコミック10社会や出版社の代表としてではなく、あくまで一個人として話し合いに臨んだに過ぎません。少しでも都と連絡のパイプを残しておこうと、猪瀬副都知事と携帯電話の番号を交換して帰りました。

「自分も石原慎太郎は嫌いなんです。都庁に対抗するわけではないけれど、自分たちでアニメのイベントをやりませんか？」

アニメレックス代表取締役社長の夏目公なつめ こういちろう一朗さんから突然の電話をいただいたのは、年も押し迫ったところです。

確かに今までの東京国際アニメフェアは、自分たちアニメ界のイベントというよりは、都の戦略にアニメ界が無理やり協力させられている、という気分でした。自分たちでイベントをやるなら、嫌な思いをして参加する必要はありません。企画も自分たちの意思で決

められます。

がぜん興味をそそられました。

12月23日、当時の天皇誕生日に、主たるアニメ製作会社の代表が、市谷いちがやのアニメプレックス本社ビルに集まりました。

ひっそりと静まり返ったビルでの会談は、秘密会議めいて、皆テンションが上がっていました。決裁権を持つメンバーだけが集まったので話は早い。その場で展示会型のイベント開催が決定しました。すぐにイベントの準備会が作られ、現場の担当者たちは会場探しに奔走します。

後に「アニメコンテンツエキスポ」と名付けられるイベントのキックオフです。

会場については、幸運なことに幕張メッセを押さえることができました。開催まで3か月を切ったこの時期に、幕張メッセが空いていたこと自体が奇跡的です。偶然にも3月26日、27日と「東京国際アニメフェア」と同日開催となりました。日程をぶつけたわけではなく、そこしか空いていなかった、というのが実情です。

出展社を募ったところ、「東京国際アニメフェア」に不参加表明をした企業が続々参加を申し込んでくれました。

こうした動きに危機感を覚えたのでしょうか。

2月末の日曜日の20時30分ごろ、突然携帯電話に猪瀬副都知事から着信がありました。

「アニメコンテックス エキスポを止めてくれないか」

というのです。

まだ宵の口なのに、酔っぱらっているような口調でした。すぐに、

「そんなことできるわけないでしょう!」

と答えて電話を切りました。

「アニメコンテックス エキスポ」は、通常ではありえないスピードで開催の準備が進みました。アニメファンの期待の高まりも伝わってきます。私たちが成功を確信した時でした。

2011年3月11日。東日本大震災が発生しました。

地震と津波による被害は、東北と北関東一帯に甚大な被害を与えました。死者・行方不明者は最終的に1万8000人以上。

当時、交通や電力網など生活インフラは麻痺し、復旧まで長い時間が見込まれました。何より福島第一原発では未曾有の事故が起こり、その危機は東日本全体を壊滅させるかも

しれない規模のものです。

倫理的に、とてもイベントを行える状況ではありません。「アニメコンテンツエキスポ」はすぐさま担当メンバーを招集して協議。やむなく中止を決定しました。

イベントよりも、電力エネルギーや人的リソースを、少しでも復興に回すべきだと考えました（忘れられがちですが、幕張メッセがある千葉県も被災地です）。

こうした私たちの中止の決断に対して、石原都知事はネットの番組で、「ざまあみろ」

と言いつちました。日本中がたいへんな時期に、いったいどういう神経をしているのか。疑問しか湧かない発言です。

この発言を聞いたとき、心の底から「東京国際アニメフェア」と別れてよかった、と感じました。

翌2012年3月31日、4月1日。1年越して第1回「アニメコンテンツエキスポ」を開催することができました。会場は同じく幕張メッセ。

アニメファンの熱が1年経っても維持されているのか。正直心配でした。

初日は幕張メッセの最寄り駅である海浜幕張駅を通るJR京葉線が止まってしまうほど

の強風で、本当にファンたちが来てくれるのか気が気ではありませんでした。しかし強風のなか、どうやって幕張にたどり着いてくれたものか、朝から大勢のファンが幕張メッセに詰めかけました。

2日間の総来場者数は4万2000人に及び、うれしくて涙が出そうになったことを覚えていきます。「アニメコンテンツエキスポ」に参加を決めてくれた各社とも、喜びを分かち合いました。自分たちの意思で、自分たちのイベントを作ることができたのが、何よりの喜びでした。

「アニメコンテンツエキスポ」は翌2013年も開催し、初年度を上回る7万人を動員しました。

この前年に大きな動きがありました。

石原慎太郎が2012年10月に都知事四期目途中に知事職を辞任して、衆議院議員として国政に復帰したのです。

ようやく正面切って「東京国際アニメフェア」サイドと向き合える土壌ができました。

「アニメコンテンツエキスポ」に参加している企業が抜けた後の「東京国際アニメフェ

ア」の惨状は伝わってきていました。

「東京国際アニメフェア」を運営しているのは東京都であるのと同時に、日本動画協会。アニメ制作会社が集まった団体で、メンバーは顔見知りの方ばかりです。彼らを苦しめ続けるわけにはいかない、というのが正直な気持ちでした。

この時期、私はすでにイベントの一線からは退いていました。現場で「アニメコンテンツエキスポ」を取り仕切る若いスタッフたちが動いて、「東京国際アニメフェア」サイドと協議を重ねてくれました。

その結果、「東京国際アニメフェア」と「アニメコンテンツエキスポ」を合体させて、新たに「AnimeJapan (アニメジャパン)」というイベントが誕生しました。

「AnimeJapan」は東京都が運営に参加しないイベントです。アニメ界のプレイヤーが自分の意思で実行できるところは「アニメコンテンツエキスポ」の理念を引き継いでいます。

2014年の第1回開催前に、実行委員会の記者会見が行われました。記者から私に、「都条例の問題は解決したと思うか？」

という質問がありました。私の答えは、

「解決したとは思っていない」

でした。

そう、都条例改正案は、既定の通り2010年12月に都議会で採決されていたのです。

しかし、私たち出版社やアニメ関係会社があれば「表現規制」に反対の声を上げる姿勢を見せたことで、実質的な運用は慎重にならざるを得なくなりました。

今のところ、東京都側が無茶な運用をする兆候は見られません。しかし、何かおかしな動きがある時には、すぐにそれを糾弾する。私たち表現者の側に立つものは、常に運用を厳しくウォッチしているという姿勢を示す必要があるのです。

おかげさまでふたつのイベントが合体した「AnimeJapan」は順調に成長を続けました。コロナ禍で一時的な落ち込みはありましたが、COVID-19が5類に分類されてから初めての開催となった「AnimeJapan 2024」は13万人を超える動員を達成し、勢いを取り戻しました。

これからも日本のアニメの隆盛を象徴するイベントとしてファンから愛されてゆくことでしょう。

一方で、東京都の変化も感じます。

現在の東京都の産業労働局の方々は、きちんとアニメやマンガにリスペクトを持って、

業界に接してくださっています。

また、東京都で60年続いた「不健全図書」の名称が変更されることになりました。マンガ家の皆さんの署名運動が実を結んだ結果です。

世代の変化とともに、社会の空気も変わってゆくのかもかもしれません。

私にとって石原慎太郎都知事に喧嘩を売るとは、私が見てきたアニメやマンガを守るために必要な行為でした。

かつて「テレビまんが」や「悪書」と言われ、大人たちの嫌悪の対象だったものが、今や日本を代表する文化になっている。

その可能性を閉じさせようとする人たちには、正々堂々と抗いたかった。それが、文化の過去と現代と未来を護ることにつながると思っただけです。

一方で、「表現の自由」という言葉をはき違えている事象も散見されます。

ネット上では、半分ビジネスで差別的な発言をしているだろう人や、それを無邪気に拡散している人がいます。

それを「表現の自由」と言うような人には、賛同することはできません。差別表現は、

「表現の自由」の中ではなく、外にあるものだからです。

近年の新しい技術で生まれた、実在の人物をAIで加工して被害を与える性的ディープフェイクも「表現の自由」の外にあるものだと思います。

私たちが「表現規制問題」と戦ってきたことが、そういう人たちに利用されるのは、辛い気持ちになります。

やはり表現する人たちは、自分たちの責任を常に意識してほしい。「表現の自由」を錦の御旗にして、「何をやってもいい」わけではありません。

世界や時代の価値観と照らし合わせて、しっかりと考えたうえで「表現」してもらいたい。

それだけはこれからも、声を大にして言い続けるつもりです。

今回、この本を出版する機会をいただいたことで、あらためて

「どうして自分はアニメやマンガ（さらにSFやミステリや特撮や、とにかく自分が好きなもの）を馬鹿にされると、こんなに腹が立つのか」

と考えました。

どうやらそのルーツは、私の幼少期に遡るようです。

1959年生まれの私は、世間でいう「おたく第一世代」に分類されます。

私が、そして私たち「おたく第一世代」が読んだり見たりしてきたもの。

かつてはきつと、弱くて小さな芽だったのでしよう。

それらは今、大輪の花を咲かせつつあります。

そうした、かつて小さき存在だったものへの愛情が、私を突き動かしてきたのです。

解説

おたく／オタクの成熟と

「社会」との距離感について

2010年の『東京国際アニメフェア』ボイコット事件は、当時のオタク的な文化の置かれた状況を象徴する出来事であり、そしてこれらの文化の担い手の成熟を象徴する出来事でもあった。悪名高い「クールジャパン」戦略の空回りは記憶に新しいが、この時期国家はマンガ、アニメ、ゲームといったオタク的な文化を、数少ない伸びしろのある輸出産業として位置づけつつあった。その一方で、当時はまだ昭和前半生まれの世代を中心にこれらの文化に対する偏見は根強く、ここで取り上げられる石原慎太郎の諸発言、そしてこれまた悪名高い「東京都青少年健全育成条例改正案」はこうした偏見が表出したものだと考えればよい。そして井上伸一郎らが発起した『東京国際アニメフェア』ボイコットは一方では国策として祭り上げられ、他方では俗悪な子供文化として排撃される現状に対する

おそらくははじめての、これらの文化の担い手たちが広く連帯した大掛かりな社会的なアクションとして位置づけられるだろう。それも、ただ「抗議する」だけではなく、自分たちでよりよいイベントを開催することで対案を実現するという、非常に「建設的な」経緯をたどったことも、この「事件」の特徴だ。

個人的にこの「事件」を考えるうえで、思い出す談話がある。それは押井守おしい まもるが1989年の『機動警察パトレイバーThe Movie』の公開時のインタビューで述べていたことだ。

へこんどの映画でやりたいことを一言で言えば、時代性。今の時代に自分が何を考えているのかを、多少なりとも込めたい。(中略)僕は東京で生まれて東京で育った人間なんだけど、子供の頃から見てきたイメージからすると、この街はもう引き返し不可能点にきている。膨れ上がるだけ膨れ上がって、パンクするしかない。実際に都市で生活している若い人にはそういうことがよく判っているはずなんだ。

実際、人間というのは、どんどん変わっていく風景には馴染まない。今の東京は形態がどんどん変わるのがウリなんです。都市の変化のスピードに自分の感覚が遅れてしまうこ

との恐怖。それが彼らの中に蔓延しているんです。

でも、東京をこんな街に作り上げてしまったのは僕達の世代なんです。そういう意味で原罪を背負っている。それにどうオトシマエをつけるかということ。それは単純に「壊れてしまえ」というヒステリックな表現じゃなく、もう少し他の抵抗の仕方。今の都市環境とかコンピュータ・システムと、どう対応して生きていくかっていうこと。〈

(〈アニメージュ〉1989年6月号より)

ここで1951年生まれを押井は「遅れてきた全共闘世代」として、かつての学生反乱の「『壊れてしまえ』」というヒステリックな表現」を総括し、「そうではない」別の方法で社会と対峙することを宣言している。

押井より8歳年下の井上は、押井が「パトレイバー」の企画チームとして当時距離感を覚えながら接していた「おたく第一世代」——ゆうきまさみや出渕裕——と同世代に当たる。この世代は「新人類」世代とも呼ばれる。

しかし正確にはこの「新人類」的な文化と「おたく」的な文化は、同じユースカルチャーでもかなり傾向が異なっていた。前者は音楽やファッションを中心とした都市のストリ

ートカルチャーであり、後者はマンガやアニメを中心とした全国区のメディアカルチャーだった。

今日における「サブカル」と「オタク」のルーツであるこの「新人類」と「おたく」は、その政治的なスタンスも大きく異なっていた。

これらの文化が拡大した80年代は、60年代の学生反乱の時代を席巻した政治性が、「ダサイ」ものとして軽蔑された時代だった。「新人類」たちは「政治の話なんてダサくてできない」と、文化的な「戯れ」に「逃走」することを選ぶ一方で、「おたく」たちは虚構の世界で現実の世界からは失われた正義や愛といった「恥ずかしい」主題を、ファンタジーの世界を経由することで背を向けずに受け止めていた。

その結果としてここ（後者）には、全共闘的な「抵抗」の自己目的化もなければ、新人類的なファッションとしての「逃走」とも違う、政治的なものとの中距離が半ば無自覚に生まれていたようにも思う。

つまり押井にとってパトレイバー「1」は、一世代下の「おたく」たちの感性を借りて発見した「そうではない」社会との距離感と進入角度の表現でもあったのだ。

その後、押井は『パトレイバー2 the Movie』において結果的に反体制的なテロに感情

移入し、特車二課の若い警官たちの青春群像を大きく後退させる。そしてゆうきまさみはそれに反発を示し、あくまで彼ら個人の成熟像として、法と秩序の枠内にとどまり、自らの「仕事」を全うする範囲での社会改良を示すことでマンガ版『パトレイバー』を完結させる。

こうして考えたとき、井上らによるこの『東京国際アニメフェア』ボイコット事件から『AnimeJapan』誕生の経緯は、おたく第一世代の示した、彼らなりの「オトシマエ」の付け方——社会化の方法——が結果的に、現実の政治的なアクションとして表現された事件でもあったことがよく分かる。

国家に対して盲目的に服従することも、ニヒリスティックに社会から距離を置くこともなく、そして抵抗すること自体を目的に自己完結もしない。自分たちなりの対案を「つくる」ことでよりよいステージを模索する。この距離感と進入角度を、おたく的な文化を受け取り、そして自らが「つくる」側に回った最初の世代がかたちにしたことを、過小評価してはいけない。

目次

- プロローグ 「東京国際アニメフェア」ボイコット 3
- 解説 おたく／オタクの成熟と「社会」との距離感について 27

1959-1977

少年の夢、おたく第一世代が見てきたもの

- 1・「3大ロボットアニメとの出会い」と「テレビまんが」時代 38
- 2・『ウルトラシリーズ』が始まった 48
- 3・『仮面ライダー』と石ノ森章太郎作品 56
- 4・青春ドラマと演劇と少女マンガ 61
- 5・好きなものを否定されたくない 67

1978-1984

アニメ雑誌「アニメック」の時代

- 1・『宇宙戦艦ヤマト』が生み『機動戦士ガンダム』が育てたアニメ雑誌 76
- 2・グッズ販売員から編集アルバイトに 86
- 3・アニメ新世紀宣言 94
- 4・富野監督との出会い、永野護デビュー 103
- 5・閉塞感と憂鬱。そして、角川へ 111

1985-2009

ニュータイプ編集部とアニメ・コミック事業部の時代

1. 「ニュータイプ」創刊秘話 124
2. セル画とポートレートの美しさを追求 133
3. 『ファイブスター物語』爆誕 139
4. 「ニュータイプ」を支えた『Z』『ZZ』『逆襲のシャア』 145
5. ライトノベル・レーベルはこうして生まれた 147
6. 角川歴彦専務追放と角川春樹社長逮捕 157
7. 「少年エース」創刊と『新世紀エヴァンゲリオン』劇場への道 165
8. メディアミックスの本質とは 175
9. デジタル化でジェンダーを超えるメディアミックス 179
10. アニメや特撮のメディアミックスのルーツは？ 183
11. アニメ・コミック事業部でアニメ製作に着手 187

12・ガンダムエース創刊 197

13・細田守監督との出会い 199

解説 「おたく」から「オタク」へ 204

2007-2021

角川書店社長、そしてKADOKAWAへ

1・角川文庫60周年と新部門への挑戦 210

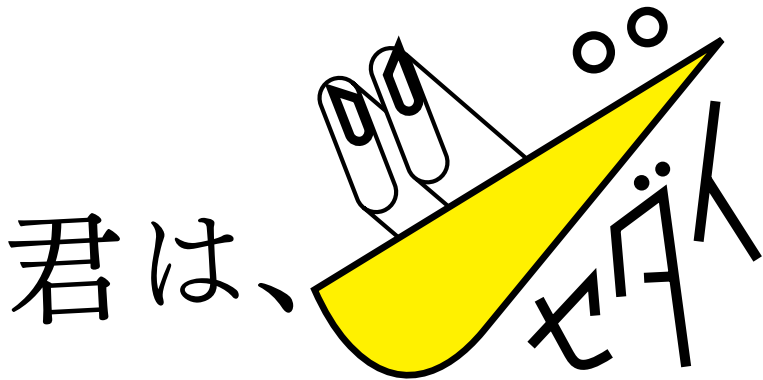
2・角川映画再興に挑戦 220

3・大合併とDX 227

4・角川歴彦との思い出 231

5・マンガとアニメの歴史を残す 243

解説 「オタク」はいかに「歳を重ねて」いくのか？ 245



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ
ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!